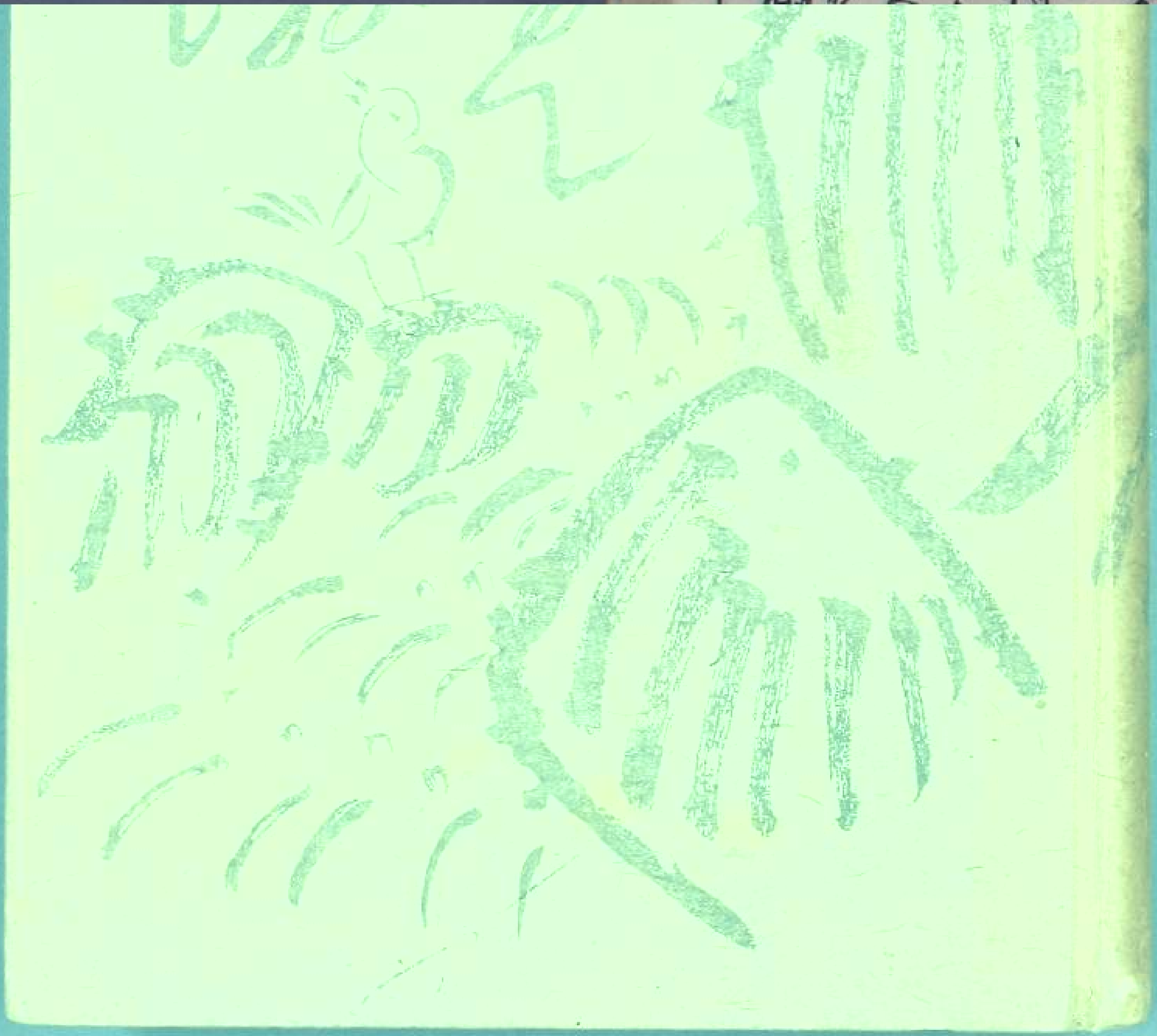
蘭奢待

歌集

蘭奢待

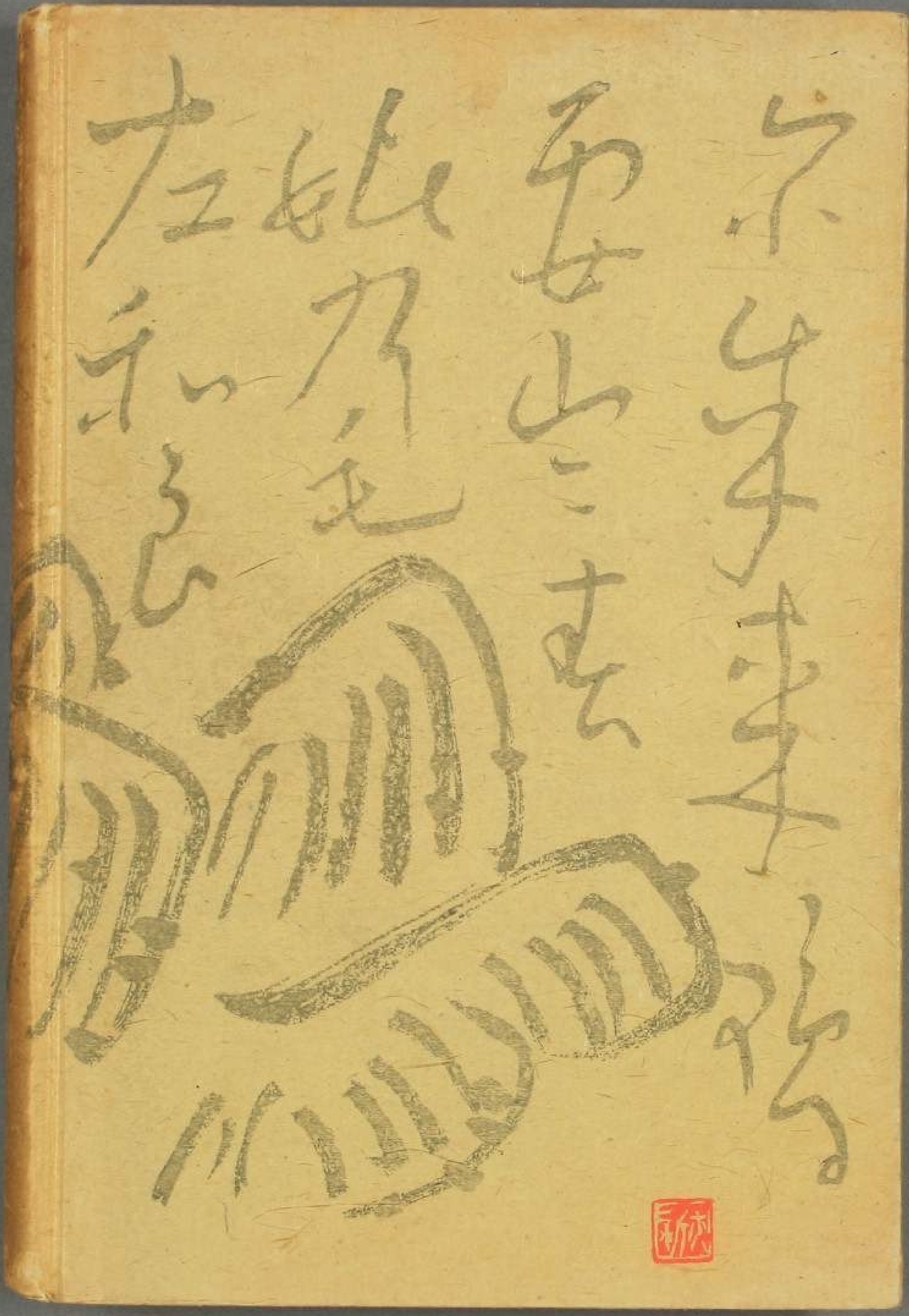
大熊長次郎著



歌集

蘭奢待

大熊長次郎著



歌集

蘭奢待（らんじゃたい）

大熊長次郎著

歌集

蘭奢待

大熊長次郎著

蘭奢待 目錄

西丸町時代 上　八五首

西丸町時代 下　九五首

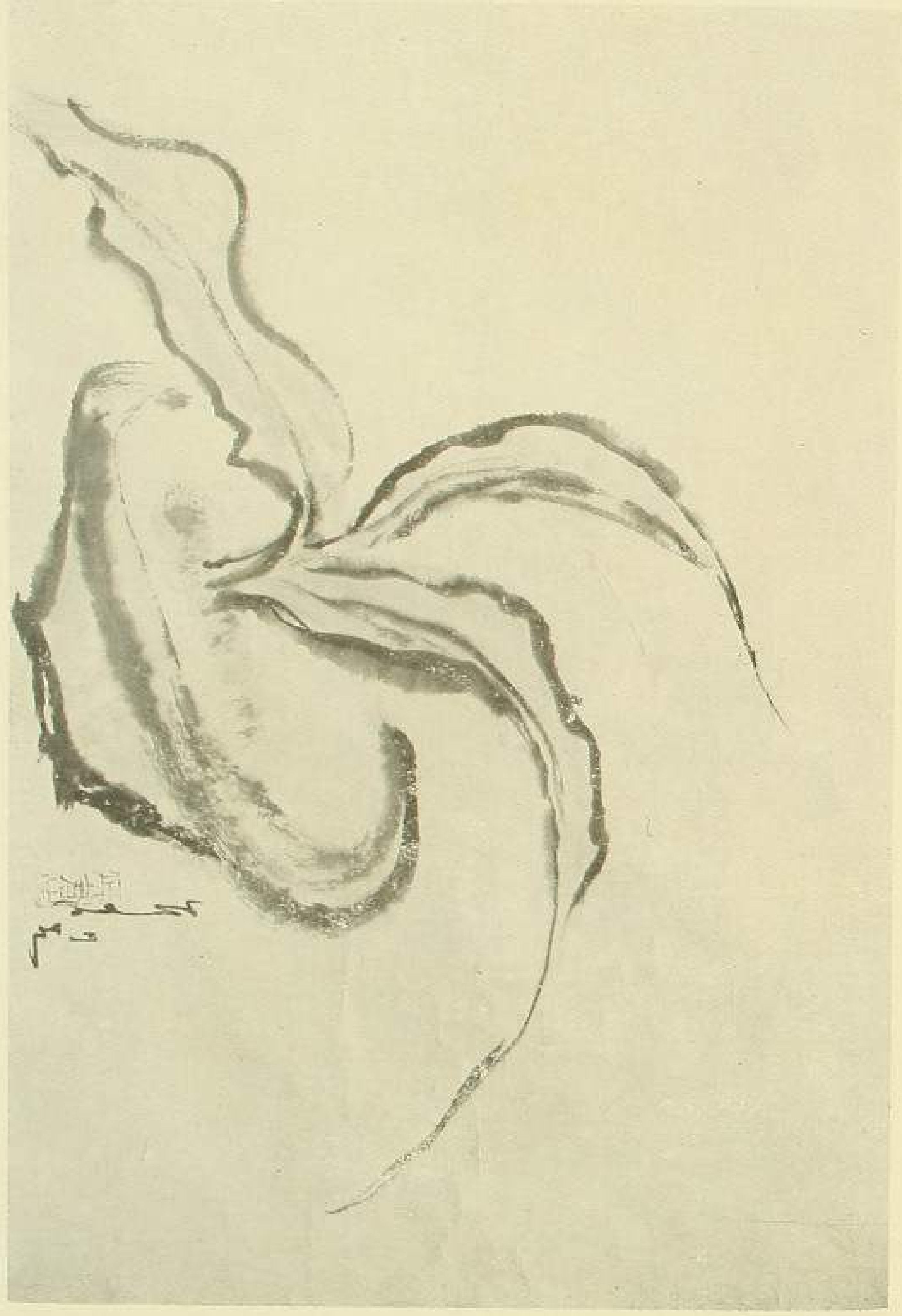
笹塚葡萄舍篇　五八首

西國羇旅篇　五九首

大災前後篇　一〇六首

細目及小記

表紙繪　大亦觀風
口繪　筏井竹の門
挿繪　大亦觀風



表紙繪　大亦觀風

口繪　筏井竹の門

挿繪　大亦觀風

西丸町時代　上

自大正十年四月
至大正十年十二月

出京 一

曉の雨のこまかさ咲きみちてひとへ櫻のはや
散りそめし

花の上に雨はそそげり起されし朝のねむりの
惜しく思ほゆ

はふつたの別れを思へばきのふなれどけさの
　朝げの心乏しも

かりずみの心おちゐず夜を早くいねては友と
　言を交しつ

ゆく方を思ひねむれず雨の夜の花もおぼろに
　更けわたるらむ

病み萎えし妹が面わを春の夜の灯のもとに見
　てわが別れ來し

二　病　友

盗汗（ねあせ）滲む友が臥着をほす間なし降りつぐ雨の
　いつやむべしや

蒼ぞらを我はねがへどこの雨は櫻の花をくだしすつらむ

わが友を思へばかなし旅に病みてただに待ちわぶ日の光かな

かすかなる眠りを見れば出でゆかず一日こもらむこの友の邊に

障子にさすうすき陽ざしに霽れしかとよろこぶ友がこの衰へや

けふは身体の宜しからむ話しかくる我にいらへのはればれしもよ

霖雨(ながあめ)はつひに止むらし友の牛乳(ちち)を沸しつつ吾はよろこべるかも

ほの暗き階子あやふし落つきて下りよと背ゆ聲かけにけり

かはやゆ戻る友を待つ間も安からずへこみをなほすくくり枕の

三

往來

古繩の暖簾をくぐることに慣れし一せんめしに腹をみたすも

皿に盛る乏しき飯のあたたかみけふは二食でことたりにけり

仕事なくてあそぶはつらしひる木原木の芽あかるく春を還すに

ゆくりなくわが來て見ればお茶の水櫻はすで
に花すぎにけり

月のゆふぐれをたのみ虚しくかへるなり湯島
の坂の埃ふかしも

いちじるくおのれ眼にたつ身の弱り悔わく時
は强ひてねむるも

つとめ

やうやくに糊口をみたす仕事を得しほつとし
て歸る濠端の路を

職を得てくつろぎかへる濠端の樹々ふかき葉
となりにけるかも

今はうゆるうれひ吾になし競り賣の手ばたき
うりを立ちて見てをり

割引の電車に乗りてはじめてのつとめ心のお
ちゐざるかも

いかなる仕事なすならむと服のぼたんをいぢ
りわがをり

同住の友病重りて茅ヶ崎南湖院に轉地す

歸り來れど待つ汝はあらぬゆかしめてひとり
寂しく床をのべたり

わくらはに來たるたよりの長からず文字のみ
だれも心もとなや

南湖院

いたづらに春は深むと海つ邊に病を守りて友
はなげくも

砂丘に友いこはしむ天わたるま日のひかりの
かくも靜けく

海雀ひらめきくだるまひるまの潮のふくれは
みち映えて見ゆ

松原を藥の匂ひながれたるほのかなるさへわ
れは寂しむ

夕波のひかりうつれる磯のかげ手をひかれつ
つ來る患者あり

夕ふかく發熱(ねつ)をおそるる友のからだかへりう
ながす松原の中に

松山に陽は傾きてすでにゆふべ濱ひるがほを
踏みてかへるも

おそ春の垂り藤散るさふり仰ぐ友の肩の上に
藤の花散るも

笛

いち早くけさはつとめに出て來たり靜かなる
かな朝の並木は

ひそまりし朝の並木路ゆきにけり宵は疲れて
此處をかへらむ

ひる暗き輪轉室の大ベルト撓みふかけれやわ
が疲れ眼に

額の上に滲み來る汗かまたしても仕事あやま
ち如何にかはせむ

此の業にいつ慣るるやといたづらにすぎし月
日の心もとなく

物を運び外に出づる時は怠けたりよしなきこ
ととわが知りつつも

いとどしく疲れて通る機關室の蒸氣の熱は顔
にあふるる

笛がなれば飯場にいそぐ友の群かなしきかな
や我もいそげり

向日葵

ひぐるまのかたへに深きわが憂ひうれひ近づ
くそのひぐるまに

ひぐるまは地にくろきかげおとしたりそこを
踏みゆき寂しき我は

咯血の報せ握れり眼の前にかがやきくらしひ
ぐるまの花

ふるさとを出で來し時も臥してゐしが血を咯
きにしかかなし吾妹子

さきはひをつねの日享けて生けりよと思ひし
ものをいまはむなしき

面やつれしてもあらむと思ふさへすでに幾日
を相見ざるかも

草の葉に朝おく露のたまゆらの人のいのちを
死なしむなゆめ

とろとろと束の間さめて悲しけれ血を咯く妹
を夢に見てゐし

めのさめて寂しくきけり夕やみになく茅蜩の
ながくつづかず

灯のもとに手をつきしかば肩をながれ汝がく
ろかみの悲しからずや

やうやくに咲きかたむける向日葵の花のさか
りのながくあれこそ

八月

夕されば眉間ににじむ汗のひかり相かへりみ
てみな息づくを

友の額に流るる汗を拭ひやりてわが身もいた
く疲れぬるかな

米本恒吉に

たはやすくひとり生きむと思はねどおひめに
たへぬけふとなりにし

大いなる眼鏡の中に眼は曇りわが友はいふも
われの身体を

小夜ふけてやきもち坂の霧はふかし電車切符
を買ひてかへる

小山忠子夫人逝く

黄の花のすでに乏しき西瓜畑そこに俥をゆか
せし君はも

四方の友みな病みにつつ鳴く蟬の聲のなかな
かおとろへぬかな

路樹の葉の埃を見ればみどり葉にしたたる雨
のあれなと思ふ

癒えたりと人のたよりのうれしくて秋風涼し
けふこのごろは

灯かげ

友よなにを争ひすなる怒るともみなおしなべ
てこの貧しさを

いち日もあらそひ絶ゆるいとまなしさすがに
我もやんぬるかな

おのづから心荒だつなりはひをかなしと思ひ
飯はみてをり

夜業して帰るみ濠の水明り石蹴りおこしわが
疲れたる

縁日の灯かげあかあかと窓に映ゆ疲れてゐる
も我は夜床に

金すでに乏しくなりし月のをはり久しくはゆかず夜の巷を

ふるさとにわが在りし時うまれたる雛鶏（ひな）もこのごろ時告ぐらむか

うばたまの灯を消す闇に眼をひらき病みてはかなき命を思へり

離愁

眼醒時計（めざまし）の力たのみて起きいづる我のからだとなりにけるかな

この夜ごろつづく不眠に疲れつつ常ならぬかも我の心は

重き身を起していづる我の眼に雨をひそめて
低き朝空

神田橋

この橋を往來(ゆき)なれてゆ時久し水肌(みはだ)こまかき冬
とはなりつ

遠くゐるものをぞおもへ篠懸の枯葉をたたく
雨はひそかに

德士來て障子張りかへてくれにけり今年の冬
は明るく暮さむ

机の上に白くたまれる埃さへさびしく我のな
まけゐしかも

友に寄す一首

八月まり共にいねはむ汝はなくてこの部屋さむく我はいねつつ

夜巡りの太鼓去りたる路次の奥霜おくらむかひそみ深きは

久富徳士ふらふらと來て去りしより十日を經たりいづくに在らむ

男ゆゑなかなか言にいはねども友の眉ねを見ればかなしも

西丸町時代　下

自大正十一年一月
至大正十一年八月

ふるさと

ふるさとの土はさびしき夕靄にふかくこもり、
て鴉はなくも

たまさかに來しふるさとの朝床に米搗く杵を
したしと聞きをり

正月

うつそ身の恙あらねどなまけゐて年祝ぎの日
のまためぐり來つ

あくた舟けさは通はぬ靜けさにみ濠かすめて
水禽(とり)はあそべり

いちやうに服あらたまる仕事はじめ拶挨かは
すめでたしといひて

宿の人のなさけにてわが部屋の前にもささやかなる輪飾りを
かけられぬ、さすがに正月のひ装、なにかうれしくて

こもりゐれば障子にふるる輪飾りのひるたけ
て長きかげをうつしつ

夕せまる外の面のいろや垂るるまでみぞれて
重き松の尖り葉

父母のため、弟妹のため、働くものを蔑すなかれ、
をさめさいへば、いづくのものもかはりあるべき

工場いづればみなをとめなるやさしさや袖ひ
るがへすこがらしの中

ゆふべ冷ゆる汗を拭きつつ眺めをり銅像の頭
に降りつむ淡雪

雪夜残業

残業の人ら乏しき雪の夜を大蛇（おろち）の直がしはぶ
きのこゑ

鴨

濠の面に消ゆる淡雪夕づきて啼きかはす鴨の
こゑ静かなり

よはじしの我のこころに親しくて夕濠ふかく
鴨のなくこゑ

み濠曲の岸邊につどふ鴫のこゑ夜を近みと相
呼べるらし

身にかかる雪拂ふさへいまはうし人ゆき絶ゆ
る濠端の路に

濠に消ゆる雪は音なし思ひわびて夕闇ふかく
身はつつまるる

何ゆゑにかかるねたみの湧きいづる夕かたま
けて人思ひをり

雪すでにほのほの昏し舟の上に蓑笠つけて動
く人かげ

濠はたの柳のかげに灯はともり日の暮はやし
雪みだれ降る

歸鄕

たまさかに歸りし我の聲ききて飛びつく甥よおほきくなりしな

貧しければ甥のみやげも買ひて來ず鳩見せにゆくも肩車して

家にかへれど親しく我を待つものの乏しくなりて甥とあそびつ

甥つれてひと日あそべりふるさとのくらしは我を誘（いざな）ふごとし

病床（ふしど）あげて我を迎ふとたしなみの薄き粧（けはひ）も面萎えてあはれ（錄一首）

病臥一年漸く癒えて湘南より歸れる友に逢ふ

一とせを病みてめぐりて來し春の大きめぐみ
に逢へりわが友

窓ゆさす月のひかりに眼をとぢていく夜さび
しきおもひせりけむ

何もかも今はうれしきとりとめてけふここに
逢ふ友のいのちや

死ぬべかりしいのちと思ひし路をゆきて歩み
遲れぬ今日に逢へりき

よしといひて思ひゆるすな食む飯の二食とき
けば心いたむを

早退

たまさかにひる早退けて來し我の絶えて久しき陽に逢ふごとし

まひるまも灯を借り業す仕事場ゆいで來て我の陽にめまひすも

晝の陽の湯をすきとほすひかりかも瘦せたりと思ふししを眺めつ

庭の棕梠に風の集る心地すれ玻璃戸めぐらし湯場の明るさ

汗ながしをらむ人らの面をうかべ何かすまなく湯にゐて思へり

晝の湯に我うつつなきこのひまも疲れてをら
むひとびとはみな

我ひとり安さにあるはよしなけれ疲れてをら
むひとびとはみな

ひごろの疲れいちじにいでたらし涎ながして
うたたねさめつ

春霞

くだかけのいづちか遠しあかつきを霞ころが
るあすふあるとの上に

朝外出のつとめ慣れたり街の中帽子のつばに
霞はねかへる

負傷

焦らだてるこころ仕事になじまぬか思はぬに
わがわざはひを招く

いとま貰ひて歸り來たれり傷つけし手をいた
はりて床敷くさびしさ

塗布藥の匂ひはげしみしきりにもこよひは母
の思はるるかな

ふりいでて音こそあらね春の雨に夜の櫻はく
ろぐろと見ゆ

夜を深く雨のふれれかうづき來る傷しばしば
に起きてさするも

國府臺

遠天に輝く山は上總野のゆふべのいろを傾け
にけり

夕なぎの野づらを遠く鳴きいでて蛙のこゑは
水にひびくも

ひといろになづさふ地の夕ひかり煙あがるは
柴又ならむ

ゆく水のみちひろがりも夕なぎて渡船を閉づ
る鐘の音きこゆ

夕星のかげます空もとほどほに河口ひろく暮
れそめにけり

木馬

甥のみやげと豫(かね)おもひゐしそり木馬くらしの
かねに代へて悔なし

晩春の神田のとほり木の馬をかかへていそぐ
汗ながしつつ

幼な兒にうたがひはなし太刀を佩き木馬(うま)にま
たがりて戰ふところ

奥の間を木馬(うま)のりまわす甥のこゑ家人をみな
集めてよろこぶ

幼き時わが傷けしと甥の頭のかすかなる痕を
あはれがりつつ

この甥をいだき守りつつ時を惜しみ米搗くひ
まも書よみし我は。

枕もとにおく木馬見ればすやすやと幼き甥が
ゆめかよひなむ

歸京さじと吾にすがり泣く甥の口金米糖のつ
のとけてをり

微恙

ふるさとの幼き甥が武者まつり今年はつひに
見ずて病みをり

病みこやりあやめの湯にもゆきがたし吹きな
がし鯉窓とほく見ゆ

幼年工

幼年工(こども)らが春の光にかがやかすひそかなる瞳
はかなしかりけり

怒りやすき吾に悔多しいましがた叱りし子ら
に菓子をわかつも

いたはりてやらむと思ふ幼年工らのいとまあ
る時は唱歌をうたふ

榛澤又藏除隊の日に

けふよりは疊の上にくつろぎて寢なとこそい
へ我もうれしき

梅雨

たのめりし心むなしく春すぎて寂しもよ人に
そむかれにけり

眼をふせておもへばさびし路の上に人ゆきわ
かれ共にむなしき

雨の音はおとろへたらし夕近くめざめてにが
き睡はきにけり

假寝よりめざめたりしがうら寂しつかれは深
くししにこもるも

時化雨（しけあめ）のひびき衰ふ夕あかり耳にけどほく鶉
なきたり

このねぬる朝の風にふきみだる棕梠の裂葉を
見てかなしめり

いそぎ來て汗ふく梅雨のふかぐもり坂下街に
埃立つ見ゆ

たり曇る梅雨のま土に栗の花の白く散りたる
をふみにじりたり

大木𦣪の歌「共にゐて寂しさ堪へむわが家の白き葡萄の花咲
きにけり」にかへす

花散りてつぶらにこもる葡萄の實君がなさけ
をいつ報ひ得む

おゆびの爪に殘りし傷の痕かすかになりて梅
雨あくるらし

良に與ふ

軒並めし眼下の家の洗濯物（すすぎもの）白くなびきて夏さりにけり

いちじるく身体弱れり眼に見えて土に風立ちけうさきこのごろ

身体そこねて勤めを休むこと多し遅れし返事（ふみ）を夜床に書くも

ふたたび

この奥に鈴虫を飼ふ家ありて雨に更くれば枕にきこゆ

小夜ふけて雨に加はる風あらむ鳴く虫の音も
遠くなりたり

ひたすらのねがひは悲しむらぎもの心ゆくら
に眠りたしと思ふ

疲れふかく躰のふしぶしに痛みありこよひも
いねず一夜あらむか

水郷

盂蘭盆の河の淺處に瓜馬のながれをとめて夕
さりにけり

舟脚ものぼりはおそき曳かれ舟澪のひかりの
すでに小暗く

こほろぎのちろろのこゑも衰へて小夜の葭生
に雨ふりいでぬ

葭原に雨のふる音河の音ふけて遠きは松ふく
風か

離(か)れぬればをとめ心に偲びつる夜をふる雨と
吾は遠からむ

青蚊張にうつる明るき朝水照(あさみで)り河邊の宿にめ
ざめたるかも

朝かげのながらふ河に帆を張るはたむろの船
のいでゆくらしも

河風のひらめきすがし青蚊張の枕邊近くふき
なびきつつ

三良を悼む

二木三良、朝鮮に病みて起たず、八月十五日遂に逝く、大木良宅にて赴報に接す、

朝床に遠きおもかげよびかへしうつつならぬ
を悲しみにけり

朝霧の草に沈めばかなしかる死のおとづれは
濡れて着きたり

けさの朝明のいまの時までねがひたる人のい
のちのはやもあらぬか

骨甕に亡骸(なきがら)となり大海(わだ)を護(も)られてかへる身と
はなりしか

いく山河へだつる國のみじか夜を寂しと君が
なげきかもねし

いまはのきはのただひとつきの水さへも離れ
てはすべな死なせつるかも

送別の思ひ出——「ふりいでしこの夕さめのいたもふれやたま
さかに逢ひし友をさとめむ」　(二木三良)

ふる雨をいたく降らしめとどめむと友を戀ひ
つる君しかなしも

二木と大木とわれのいね語りうしみつ過ぎて
なほ寢惜しみつ

上野の驛に別るる時に笑はむと顏あげて君が
涙ながしき

雛鶏

歌會席上作

とさかいでて日淺き雛鶏(ひな)のおぼつかな日暮の
土に放ち目守るも

笹塚葡萄舎篇

自大正十一年九月
至大正十二年五月

殘蟬

街中に鳴く殘り蟬稀にありて秋まだ暑き夕日ざしかも

鷄頭の埃をかぶる紅乏し街かげに來て汗ぬぐひをり

海山に暑さ避く人ねたまねどこらへかねたる
汗をおとせり

汗ふきて疲れいとどし歸りなばこよひは早く
躰をやすませむ

にはとりをしめころすこゑ街うらに心つかれ
ていきどほりたり

雀らのみだれて下る夕野づら遠沒りつ陽は草
を染めたる

殿井芳雄の逝報いたる

心深く疲れし夜半は夢にさへしばしばさめて
悲しかるかな

風遠き夜半にめざめて鳴きわたる鷺きくべく
は心傷めり

あかつきの雨ふりながら静かにて穂明りすで
に窓を透せり

垂穂田に霧は深しと朝床の友に聲かけていで
にけるかも

身に慣れし朝の勤めや霧の中にきほひ鳴く鷄
を聞きつつ行くも

わか草の妻病みぬると友が炊きし焦飯を吾も
寂しみて食す

魚市場閉づるゆゆしさわが身にもコレラ豫防
の鍼を刺したり
（コレラ猖獗す）

朝顔は實にこもりつつ庭の邊の陽のいろとみ
におとろへしかな

十三夜

暴風雨(あらし)なぎて空に消散(けち)らふ雲のかげこよひの
月は待つべくなりぬ

荒磯

船つくる新木にほへり渚邊に潮のひかりを浴
びて疲れし

磯を來て癒えがたき身を哀しめりかくはたや
すく疲れたりしか

しばし眼を閉ぢて安けし木工（きだくみ）の槌音こもらふ
大船の腹

夕凪の磯の静けさ松葉焚くと人しあらねど立
つけむり見ゆ

敷石道（いしみち）に消えて時雨のあともなし夕明るみに
おつる松かさ

凪船屋の店頭（おもて）は子らに賑ひて海の夕照りゆれ
とどきをり

夕小田に落穂をひらふ人見えてうしろに赤く
おつる陽のいろ

田の中のぽぷら並木の逆なびきひかりあつめ
て夕ならむとす

兄に寄す

くろ米はつめたかるらむ冬さりてふるさとの
兄が眼に見ゆるなり

兄の手紙長からねどもかなしけれ恙ありなば
いひおこせとふ

ひとつ家につひに住み得ぬ性をもちてなほ寂
しもよ兄を恃めり

祝ひの歌

みのり田の垂り穂の稲を米に搗きわが家の榮
はよろづ代までに

殘業

殘業をいひ渡されぬ明日よりは夜冷えに備ふ
肌着重ねむ

夜どほしの勤めおそれぬ現在にあらぬ身を警
めて生きなむ我は

世に生くる思ひはほそし夕すでにうつろふ窓
にふけ落しつつ

父母を安ましむことつひになき我のよすぎよ
悲しく思ほゆ

灯のくらき夜食場に來る人乏し硬飯に茶をか
けて食したり

埃あがる銀座通りの夕さむし高島易斷の旗も
古りたり

つつが

何くれと友のみとりの有難さ早く丈夫になり
たきものを

熱いでてめざめ果敢なし朝かげは小田の薄氷
に白みそめたる

わが友の心づくしの白粥も鍋にあましてここ
ろはれぬを

起きいでて火鉢の前にうづくまり乏しくなり
し火をあつめつつ

歳末

み濠曲に來て鳴く鴨のこゑかなし時雨に暮る
る日を重ねつつ

たびまねく鴨の羽交ひに時雨降り悔てもとな
き年ゆくらむか

たのめなき冬の曇りやこの年もなになさずし
てふりにけるかな

春さらば貧しくもわがにひ裝ひせめて門邊に
松を立てなむ

冬の雨降りを乏しみ窓下のひなたの土をゆく
人の見ゆ

またしてもしてやられたる阿彌陀くじ我にいとまのありと思ほゆ

遠空に火をあやまちし煙ならむ月夜ながらにふき流れたり

この年も御用納めの日となりぬかへり見て思ふ心さびしも

いとまなきわが世か冬の休暇にもふるさとに來て米搗きにけり

朝寢してきけばすまなし精米場（しらげば）にはやいそしめる兄の聲すも

三年ぶり米搗きにしが身のつかれ疲れてひたる湯の有難さ

あだ日

恙なくありと起してつぎがたしひとりひめなむ筆かみにけり

つきつめて仕事つらぬく力なしひるさへねむきこの日ごろはや

ねてきけば氷土の上にふる霰かへらぬ人の面とほどほし

かくのみに貧しき我の金さへや盗まねばならぬ人を思へり（盗難）

落つけばいたく腹へりぬ小夜ふけて盗難届わが書きてをり

雨

あまねくは彌生にむかふ地のゆるみ降る雨あしもすでにこまかし

降る雨にぬれて明るき樹々の肌ふきよろふ芽も近くしあらむ

○

血を喀きやすき命をもちて人しかなし雨降りて寒さ遽にかへる

ふるさとの山のさ蕨にぎ雨にこぶしとけなむけふきのふかも

○

おちつきてたより書きなむ淺宵を地震（なゐ）來て雨の降りいでにけり

西國覊旅篇

自大正十二年六月
至大正十二年七月

西國行

路樹の葉のととのへる葉も徂く春の光を深く
ふりかぶるなり
若葉かげゆきつつ思ふしらぬひの筑紫の國に
春を惜しまむ

品川の臺場にあかく灯はともり海くろぐろと
更けそめしかも

志州鳥羽港にて

日和山にのぼりて見れば眼にひらく海の船々
旗ひるがへす

汗をふきつつ眺めてをれば大船の島にかくれ
てなほ噴くけむり

沖つ邊にふきたたまりし雲のかげ潮くもり來
て幽かになりぬ

草原をひかり靡かす海の風松の木の間にこも
りてきこゆ

漁り夫のたくましきものみな裸ゆふべ明るき
濱邊をゆくも

夕なぎの明るき濱に苫張りて貝海老鮪のるゐ
をひさげり

岬松に風のいづればおのづから皺だちふかき
ゆふ海のいろ

船中――瀨戶內海にて

船の中にひるつかの間をねむりしかさめて寂
しむかたき木枕

遠くゆくは四國がよひの船ならむ水脈あざや
かに島をめぐれり

海の明りもひろく薄れてつきそむる島の遠灯
に靄ぞふるらし

旅といへどゆたかならねば船底にしばしばさ
むる夜の浪の音

島の門に見えしあかりも乏しくなり潮風くら
き星月夜なる

船の笛海にひびけば更けしづむ灯を抱きてせ
まる四國の山々

島かげは朝靜かなりほそく立つ炊ぎのけむり
みなむらさきに

かげおとす青島々や朝はよろし船路の日和さ
だまりにけり

別府温泉にて

湯の壺にあふるるいでゆおとがひぞ深くひたして我の安けさ

健かならぬ母をわがもてり山の上の坊主地獄を湯の花をもとむ

さしむかふ二人となりてくつろげり君酒を酌み我は飯くふ（同行河野愼吾氏）

灯に描きてかなしきことを偲べども旅人われは床にねむりぬ

湯をあびてにはかに出づる旅づかれこの湯どころにぐすりねむりぬ

耶馬溪にて

巖腹の洞門をかよふ馬一つひなたにいでて嘶きにけり

蒼ぞらに立はだかれる岩むら山おどろき仰ぐこの谷底に

未明、大村灣を過ぐ

眼をあけてかすかに見れば松の間に海の朝明は裝へるらしも

遠く來しおもひやうやく寂しくて海のあかつきを雨けぶりをり

松本松五郎氏に

かくのみに逢へばたやすきものながら幾日戀
ひつるわが思慕(おもひ)かも

天かけて江戸長崎はへだつとも心はここにつ
ねの日我は

喜べばこといひがたし傘さして肩ならべゆく
この樂しさを

長崎

さみだれの雨あしながし唐寺の丹ぬりの壁に
夕ふかして

雨しげき墓山につく灯はわびし港の方は暮れ
なづみつつ

國のはて長崎に來てねむるよといつか疲れて
眠りたるらし

船の笛しきりにひびく港空や朝のひかりのす
でにあまねく

わが友にふたたび逢ふはいつの日かといただ
く飯も懐しみ食す

籠に盛りて美事なるかな朝市の枇杷の實もな
がく思ひ出づらむ

この町の花のかたみぞ木蓮のこぼれたるさへ
われはいとしむ

此の街の人めでたけれおもむろに長柄の煙管
とりてくはへぬ（唐人見所街）

久留米歌會——上野氏宅にて

一つきの酒に酔ひたる唄ながらおぼつかなく
も張りあげにけり

筑紫野に藁焚くらむかあかあかあかと火の見えて
夜もいたく更けぬる

城土芳子夫人深夜八幡驛に迎へられ果物などを賜ふ

人はみななさけに篤しいづかたの國にありと
も寂しからんや

攝津歌會――戸根氏宅にて

長旅の疲れやうやく出づる時をさめらは來て
歌よみにけり

京都にて――信濃より起せる大木良の消息をうく

信濃なる友が手紙を灯にひろげ讀むは悲しも
よ吾も旅にゐて

山ふかくゆかば癒えむとゆきしかど飯へりゆ
くと書きておこせり

久しくも逢はねばくるし友がからだ盗汗すく
なくなりにつらむか

旅にゐて友の文見れば逢ひたくて我の涙は湧
きたるらしも

歸京

東京の空の明りを遠くのぞみ滊車近づくよ美
しき灯に

長崎物語

その一、殉教者を偲ぶ

火も水もなにかはあらむきりすとの光のもと
にいのち死なしめ

まぼろしの天にゆかむと脇腹に血槍をうけて
人死にけり

さんたまりあさんたまりあのころごろは天に
ひびきて人灼かれける

その二、

ピナテエルの枕——愛妾であつた丸山の一遊女に去られてから、その枕を抱きつつ、終に人にも逢はず生涯を終つたといふ老ピナテエルの話。

尋常(よのつね)の煩悩ならぬぴなてえる夜々のなげきに
いだく小枕

あかつきの閨房(つまや)にさめてかきいだく枕つめた
く思ひたりしか

玉の緒のきはまる時も手を放たず枕の上に涙
ぬぐひぬ

その三、美女踏繪の圖

華魁がおゆびつめたき爪紅のいろにいでめや
と繪を踏めるかな

かくのみにむごき刑笞(しもと)の世にありや神の像(すがた)を
足に踏ませぬ

美(くは)し女(め)が裾をさばける娜(たはや)かさ夜空を焦がすか
がり火のもと

その四、崇福寺の大釜——昔、大いなる飢饉ありし時、こ
の高僧、托鉢して得たる米を此の大釜に炊きて
人々を助けしとか

野も山も草の根すらも食みつくし今は哭(ね)にな
く人ごゑもなし

み佛はここに在りけり倒れたる人も眼をあけて掌を合せたる

いにしへの大き聖がまま炊きて人を助けし大釜ぞこれ

み佛はここに在りけり倒れたる人も眼をあけて掌を合せたる

いにしへの大き聖がまま炊きて人を助けし大釜ぞこれ

大災前後篇

自大正十二年八月
至大正十三年八月

脚病む

向日葵の花咲きつぎて久しかれよ癒えなばた
だにわが歸りなむ

ふるさとの土を踏ねば癒えざらむ茂樹がもと
をゆき嘆くかも

庭に來て友にわかれを告げながら萱の秀つかむわがたよりなく

向日葵の花のさかりは歸らむと慰さはいへどいつ癒ゆるべき

杖突きてあゆみいたはる衢の中ひた照る路の埃ふかきに

縁にのる雛鶏叱りつつひる床に脚痺れゐてすべなきものを

ひるたけて米搗く杵の音おもし藥あほぎて眼を瞑りをり

注射鍼刺してややに鎮まる脈の數ただに死ぬとはわが思はなくに

閉塲(はね)を叩く芝居の太鼓とほく更けて今夜(こよひ)もか
たし我の眠りは

日ざかりの窓下すぐる土車橋にかかりてとど
ろききこゆ

ひと日暑くすぎしこよひは香の物茄子の茶づ
けが食したかりけり

二木三良を憶ふ

梧桐の垂果にさやる風もなしかかる日人はい
のちおとせし

青竹のはだへをすべる通り雨こよひは涼し灯
のゆらぎさへ

都築爲世より藥を賜ふ。彼も亦病みてあれば

ありがたく思ひしのべばまけながき友の病に
おもひいたるも

青柳のみだるる見ればやうやくに秋づきてう
れし衰へし身の

關東震災

大正十二年九月一日、鄕里にて遭遇す

米俵とどろきたふれ土ぼこりつかの間にして
部屋をおほへり

竈の火に水そそぎつつ倒れたりはやく逃げよ
と人々さはぐ

家人のみなつかまりし梅の木のたよりなき木
に我もすがりつ

街ゆけば人の怖れぞ大いなる山噴くといひ海
陥つといふ

二日、難を冒して單身上京

都の四方にひろごる黒けむりものほろぶいろ
は日の中に見ゆ

群れ來るは火をのがれ來し人々ならむ疲れて
道に倒れたるもの

けふの日を誰思はめや街中に足袋跣足なるを
とめ子のこども

照りつくるま夏日あつし汗たれて踏む灰原の
見る限りなく

思ひゐし友みな恙なかりける疲勞の中にここ
ろゆらぐも

西瓜わるとみな集りぬ忘れゐし果物の香をな
つかしみつつ

數日後、偶然神樂坂にて小田原より逃れ來し中井文美彦に會ふ。

街中に生きてありしかと相抱き泣ける我らを
人あやしまず

佐久氏間夫人けい子なほ行方不明

かすかなる望みにすがり札張りあるくすでに
十日を過ぎにけるはや

ゆく人のよくぞ似たると立どまりふりかへり
つつみなむなしけれ

遂にかへらず

面かげは遂に悲しけれ火の中にひたすらにな
りて子を護りつる

幼くて人妻となり母となりありたることはゆ
めのごとしも

山居樂

一

秋の夜の月夜もふけて草の穂に遍くくだる霧
は音なし

崕の上をふけてかへれば聲をかけぬ月の光に
湯を浴びる人

風おちて月夜さゆれば遠空に不二しろがねの
ひかりはなてる

なく虫もやうやく草に衰へてけさ見れば不二
に雪ふりにけり

二

垂水やや乏しくなりぬ山腹に蛇もこもりて土に遊ばず

ひとりゐて冥加はふかし松ヶ枝にゆふべやさしき山鳩のこゑ

山住みの身のうら安さたまさかの友をもてなすに芋の煮ころがし

このあした庭に落葉を掃きあつめ火を焚く我のひとり心や

たまたま町より來たりし魚うり安來（やすき）節うたふと山にひびかす

茅すすき猫やなぎさへ光りつつゆふべは寒し
野をわたる風

人に寄す

風ふけばなびく芒のうらほけてかかるあはれ
を我は見がたし

三

前小田の堰おつる水は靄の中にやや夕さむく
ひびきてきこゆ

山の端におちかかりたる日を惜しみ稲むらつ
める人かげ寒し

あかつきの刈田にそそぐ雨の音寒くおぼえて
起きがたくをり

けさの雨は時雨に似たり大地震に人死なしめ
ていく日をか經し

ゆくりなく見れば乏しき田の水に泥をかぶり
て動かぬうろくづ

葡萄園にくろみ殘れるたねぶどう雨とぼしく
て空のいろふかし

舊師宮崎芳助氏に會ひて

七年をすぎてかはらぬなつかしさわが先生の
髭のよろしさ

朝の影

いきの緒のかすかにさめておもかげのおぼほ
しければまた眠るなり

うつつなく瞑ぢておもへばまなうらにいま見
たる夢のかすかなるかげ

眼のさむればすでにあかつきの光なりかなし
きゆめをわが見たるかな

額の上になにかつめたく滲みわたり眼のさめ
にたるうつし世あはれ

庭の邊にあしたの霜の白くふり南天の實のこ
ぼれてかあらむ

雀らのさえづるきけば屋根の上に霜ふみみだ
しよろこぶらしき

精米場(しらげば)に誰かくさめをすると思ふたちまち米
を搗きいでにけり

うつし世は米搗きにけりまぼろしにすがりて
我はしばしありける

おもほへば命あるものみなかなし心あるゆゑ
になやみつらんか

かくばかり心つかれて起きいづる朝のひかり
はまぶしかりけり

朝餉に後れつめたくなりし鍋の汁火にかけて
ゐて悔ゆることあり

夜の道わがいそぎ來て驚きたる水のたまりを
かへり見にけり（省、四首）

年ながく仕事わすれてあそびくらし人のよは
ひに驚きにけり

埒越えて遊び暮らせどおろかおろかなほ消し
がたきこの寂しさを

小夜床に涙ながしぬみづからに心かへればばか
くこそありけり

蜜柑

おとなしく頭剃らせてゐる甥の目の前にある
褒美の蜜柑

淺春

舌に刺す木の芽の味も嘆きつつ食せばはかな
く思ほゆるかも

たなごころ握りひらきも力なくいく日ぞ我が
こころ屈しぬ

春雨は音はなけれど一日降りて天の夕戸を閉(さ)
すがかなしさ

やる方なく傘さして外に出て來たりぬれて明
りをたもつ草原

籔かげを夕ゆく人の傘の上に散りこぼれたる
白梅の花

よき日和となりたり我も世の人のごと下駄ふ
みならし街を行かむ

久しぶり日比谷に來たり猿熊のやさしき掌(て)を
ば愛(かな)しむ我は

噴水のしぶきの光やや寒し池に來る人まだと
ぼしくて

こころやや孤獨(ひとり)をはなる鳥けものここにやさ
しく遊ぶを見れば

災後の街にもさすがに春は訪れて

おぼろめく靄の街の夕灯かげ見ゆるかぎりは
假家なれども

桃と青木

今井嘉雄氏宅にて大木良氏、大亦觀風畫伯などと會して床
に活けたる桃と青木をよむ

さかりややすぎたる花も春の夜の灯のもとに
見れば匂ふに似たり

瓶にさせば青木廣葉のかげに見えてこのくれ
なゐの珠のめでたさ

床に活けし緋桃白桃ながめつつ食すによろし
きあられなりけり

夫人に寄す

桃の花に青木そへたるつつましささながら人
のおもかげにせむ

中川靜人描く「永井不二夫の肖像」贊

春の夜を雨をよろしみたてたれば宇治のかほ
りは又あかぬもの

九品佛

ちりあくたふりかぶる日夜のわが勤めわすれ
て遊ぶ春の一日を

櫻ばな散りしきるかなとふり仰ぐ春の曇りは
やや深くして

みほとけのおゆび輪にくむ慈悲すがたさくら
散華(さんげ)の中にこそ見む

みほとけのおゆびを見れば幼な兒が結ふ稚子
髷に似てをかなしも

しきりに散りて花もありなむ草にねて幽かな
りけり百鳥のころ

とぢたまへる彌陀のまぶちのゆふひかり櫻を
踏みて吾も歸りなむ

草咲きてゆきとどまらぬ春のみち學童の群は
かけてゆきたり

おほかたは芽をふけれども欅の木まだあらは
なりにぶききのいろ

都築爲世逝く

木々の枝にけさおく春の別れ霜光りかがやき
つかの間に喪し

通夜を戻る朝の衢にさす光ひとりとなりて涙
ながしぬ

さみだれ

梅雨に入りていく日たもてる曇り空青葉の上
に降りひらくらし

さし交す木々の枝ふかき葉となりてこよひは
雨の音しみみなり

よもすがら假家の雨になやむらし幼年工のゐねむる見れば

さみだれの日ぐれを遠く歸り行く子供がはける長靴あはれ

この家に厄介になり月あまり柘榴の花の乏しくなりぬ

けふは三度怒りたることを思ひ出しすこし悔つつ床敷く我は

ときをりは我もあはれを思ひつつ佛の書をよみて寢にけり

いにしへの魯(おろか)な猿がてのひらを驅けめぐりたり釋迦のてのひら

松村眞良より山に歸りて勞を癒めと消息あり

雉子なく故郷の山にかへり住み青き木の果を
吾は拾はんか

松風の清き山寺に移り來て心堪へよと言のか
なしさ

紫陽花

紫陽花は咲きあふれたり月光(かげ)の青きひかりは
庭にかがよふ

夜おそくわが歸り來て疲れたる熱き息吐けり
あぢさゐの花

歸り來てかたき革帶ときはなちくつろげる腹
を撫でて寂しむ

わが眠りいづくに求めむけふのたより友の二
人が血を喀きにけり

○

朝風は閃くに似てすがしけれ紫陽花の露をふ
きこぼしたり

裸になり朝庭に剪る紫陽花の手にあまる花を
持ちてうれしむ

幼な兒がよろこびかつぐ紫陽花の花こぼした
り朝のたたみに

蘭奢待　完

卷末小記

1

「あらたまの年たちかへる元旦は我も朝寢をゆるされにけり」といふ、これは大正十年の一月元旦の歌である。思ふに自分の半生の嘆息であるらしい。或はかゝるあはたゞしい生活が、おのれの一生をついて廻るのではあるまいかなどと考へると甚だ心細い次第でもある。本集に收めた短歌は、大正十年の春より同十三年の夏に至るまでの作、これまた流々轉々の內に詠み放したるもの、自ら粗雜なる所多からむと秘かに恐れてゐる。終始に互つて諸賢の御高敎を仰ぎ得るなれば幸ひこれにすぎたものはない

2

配列法は創作年代順として、更らにこれを五つの時代に編別した。機關の不自由の爲に未發表であつた作が約百五十首、外に改作或は增補したものも若干あり、數にして四百〇三首である。通讀してあたかも自抒傳の如き感が深く、作者自身とすれば假初の一首といへども當時の思出の種たらざるはない。これを靜かに觀照するなれば硫石

に古い作品は古い程稚拙感が深く、甚だ氣おくれのすることであるが、此度は暫らく幼きを幼き姿として、目を瞑つて創作の順次に輯錄した。讀者ねがはくば此の書の頭初のみを讀んですてたまふ勿れ。

3

「蘭奢待」といふのは奈良東大寺所藏の黃熟香の異名である。自分が未だ少年の頃、同志と共に此の名を冠した雜誌を出してゐたことがあつた。今にして思へば荒漠たる生活の中に、唯一意作歌を樂んでゐたことは、遠き世の名薫に憧憬してゐる姿にも似て、かなしい自分の過去であつた。今本集にこの名を撰ぶ。たまたま香道秘書に「芳野拾遺に丹後國與佐郡天の橋立の橋柱なり、二條院の御宇に出、同國甲武山に埋む、其の上より蘭を生ず、薫四方に滿、仍其の根を堀取るに至りて埋所の木を得たり、則勅して蘭奢待と名づく、東大寺に納む」といふ文章があり、緣起も亦甚だたのもしく思ふのである。

4

本書が世に出ることは自分にとつては寧ろ意外事に屬する。これは全く友人の好意

である。大木良氏は長い間生活上にまで厄介をかける事の多かつた自分の作歌伴侶であるが今又此書の出版に就ても進んで一切の苦勞を引き受けてくれた。其の他出版上種々御援助下された、今井嘉雄、高橋隆平、中井文美彥、永井不二夫、中川靜人、鈴木杏村の諸氏、並に一々其の名を擧げ難いが、激勵援助を頂いた人々が各方面に甚だ多い。又大亦觀風画伯、筏井竹の門の兩氏は、特に本書の爲に御多忙の時間を割いて、表紙、口繪に立派な繪を賜ふた。これ等皆、生涯、肝に銘ずべき忝けない事のみである。

5

自分の知己には不思議にも中河與一氏に「光る波」の著ある以外には、既に出すべくして歌集がない。河野村野若林酒井などの先輩諸氏、或は今後親しく自分が指導を受くるべき古泉千樫師の如きも未だその大著を見ない。此の中にあつて後輩の自分の歌集が出るといふのは なかなか不安である。けれども遲かれ早かれ以上の諸氏の著書は世に出づることであらうし、又、自分とは最も因緣の深い、松本松五郎、筏井嘉一、大木良の三氏の如きも恐らくは近き日に快著あらむと思ふ。

此處に以上の餘言を記すのは、自分の作品が常にこれ等の諸氏の刺戟鞭韃を蒙る事が多く、又自分の幽かなる著書の如きは後世これ等の諸氏の名に依つて僅か世に記憶

さるゝに至るかも知れぬからである。（大正十四年二月十七日川崎市見染町大木宅にて記す）

6

花信は未だ乏しいが彌生といへば流石に春らしい。舊冬中から病臥してゐる父も漸く快方に向いて來た。

少年の頃から蘭香待の時代を通じて苦勞を共にして來た、久富德士、米本恒吉、松村貞良、大石亮三、榛澤又藏、佐藤孝太郎の諸君が、遊びに來て校正刷になつた歌を見ながら今更ら當時の思出が深いといふ。

よき友情の中に育れてゐる自分を考へると、何んとなく安心して此の書を世に送り出せる氣がする。幸ひ長く我が書の上にあれかし。

三月五日夜鄕里にて

大熊長次郎

謹みて記す

さるゝに至るかも知れぬからである。（大正十四年二月十七日川崎市見染町大木宅にて記す）

6

花信は未だ乏しいが彌生といへば流石に春らしい。舊冬中から病臥してゐる父も漸く快方に向いて來た。

少年の頃から蘭畬待の時代を通じて苦勞を共にして來た、久富德士、米本恒吉、松村貞良、大石亮三、榛澤又藏、佐藤孝太郎の諸君が、遊びに來て校正刷になつた歌を見ながら今更ら當時の思出が深いといふ。

よき友情の中に育れてゐる自分を考へると、何んとなく安心して此の書を世に送り出せる氣がする。幸ひ長く我が書の上にあれかし。

三月五日夜鄕里にて

大熊長次郎

謹みて記す

蘭畬待細目

西丸町時代上篇

出京（二十一首）……三
つとめ（七首）……一一
南湖院（八首）……一四
笛（八首）……一七
ひぐろま（十一首）……二〇
八月（九首）……二四
灯かげ（八首）……二八
離愁（十一首）……三一
ふるさと（二首）……三六

以上大正十年作

西丸町時代下篇

正月（八首）……三九
鴨（八首）……四三
歸鄕（十首）……四六
早退（十首）……五〇
負傷（五首）……五四
國府臺（五首）……五六
木馬（十首）……五八
幼年工（四首）……六二
梅雨（十首）……六四
良に與ふ（七首）……六八
水鄕（八首）……七一
三良を悼む（九首）……七四
雛鷄（一首）……七八

笹塚萄葡舍篇

殘蟬（十五首）……八一
荒磯（八首）……八七
兄に寄す（四首）……九〇
殘業（十首）……九二
歲末（十一首）……九六

以上大正十一年作

あだ日（五首）……一〇〇
雨（五首）……一〇二

西國羈旅篇

西國行（四十七首）……一〇七

よき友情の中に育れてゐる自分を考へると、何んとなく安心して此の書を世に送り出せる氣がする。幸ひ長く我が書の上にあれかし。

三月五日夜郷里にて

大熊長次郎

謹みて記す

蘭奢待細目

西丸町時代上篇

出京（二十一首）……三
つとめ（七首）……一一
南湖院（八首）……一四
笛（八首）……一七
ひぐるま（十一首）……二〇
八月（九首）……二四
灯かげ（八首）……二八
離愁（十一首）……三一
ふるさと（二首）……三六

以上大正十年作

西丸町時代下篇

正月（八首）……三九
鴨（八首）……四三
歸郷（十首）……四六
早退（十首）……五〇
負傷（五首）……五四
國府臺（五首）……五六
木馬（十首）……五八
幼年工（四首）……六二
梅雨（十首）……六四
良に與ふ（七首）……六八
水郷（八首）……七一
三良を悼む（九首）……七四
雛鶏（二首）……七八

笹塚荀蒲舍篇

殘蟬（十五首）……八一
荒磯（八首）……八七
兄に寄す（四首）……九〇
殘業（十首）……九二
歳末（十一首）……九六

以上大正十一年作

西國羈旅篇

あだ日（五首）……一〇〇
雨（五首）……一〇二
西國行（四十七首）……一〇七
長崎物語（十二首）……一二七

大災前後篇

脚病む（十五首）……一三五
關東震災（十五首）……一四一
山居樂（十八首）……一四八

以上大正十二年作

朝の影（十六首）……一五六
淺春（十首）……一六二
桃と青木（五首）……一六六
九品佛（十首）……一六九
さみだれ（十首）……一七三
紫陽花（七首）……一七六

以上大正十三年作

編輯後記……一

蘭奢待奥附

大正十四年四月一日印刷
大正十四年四月五日發行

著者兼發行者　大熊長次郎
八王子市三崎町二〇番地

印刷所　世界新聞社印刷部
八王子市本町三丁目五七番地

印刷者　大石俊一
八王子市本町三丁目五七番地

發行所
川崎市見染町十六大木方
蘭奢待發行所

（定價壹圓八拾錢）